

在ロシアジャーナリストの徳山あすかさんが一時帰国したのを機に、ロシア最新事情を聞こうと、5 月 9 日大阪で「徳山さんを囲む会」が関西ロシア文化サロンと大阪日ロ協会の共催で行われました。徳山さんは、ロシアメディア「スプートニク」で日本とロシアに関わる様々な記事を書いています。また、プライベートにおける取材活動としてクルスク、ベルゴロド、ドンバスなどウクライナ戦争の前線にも度々出かけており、自ら撮った写真とともに、現地の様子をつぶさに話していただきました。なお、徳山さんの講演会は東京でも、日ロ文化サロン東京や ROTOBO、拓殖大学などで行われました。以下は、5 月 9 日の大阪での講演内容を、編集部で整理・要約したものです。(編集部)



2025年5月9日 関西日ロ文化サロン

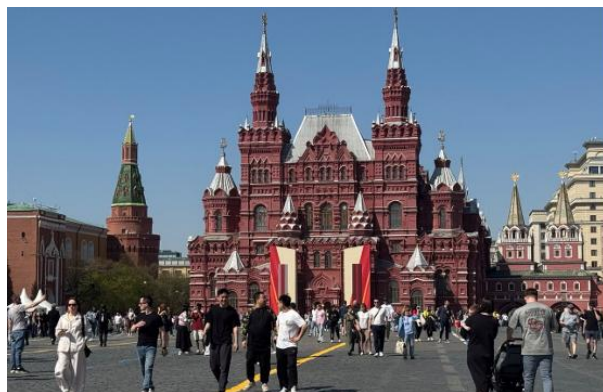
ロシアの現在～モスクワ最新事情と前線の町

徳山 あすか (ジャーナリスト／モスクワ在住)

私は、大学を卒業して日本のメディアで働いた後、2013 年からロシアに留学し、2015 年にロシアの国営通信社「Rossiya Segodnya」(スプートニクの親会社)で勤務を始めました。12 年間ロシアに住んでいます。今回は 2 年ぶりの帰国です。今日は、私がモスクワで暮らしていて日頃感じていることや、実際に取材に出かけたロシアの地方で見聞きしたことを、お話ししたいと思います。

平常運転が続くモスクワの市民生活

モスクワの日常生活は日々便利さが増しています。時にはドローン攻撃防止のためモバイルインターネットが一時遮断されるといったこともありますが、全体として言えば街は活気にあふれて、東京と変わらない生活を送っています。



赤の広場に集う観光客や市民

ただし今週は特別でした。5 月 7 日から中国の習近平国家主席がモスクワを訪問しました。彼はモスクワ南西部のブス

コヴォ空港に到着したのですが、その時は空港が閉鎖され、モバイルインターネットも一時使えなくなりました。モスクワは通常、タクシーや宅配のネットサービスがとても充実しているのですが、例外的に宅配が頼めず、タクシーも通常の 3 倍くらい値上がりしました。

モスクワでは外食の多様化が進み、レストランが賑わっています。ロシアでも和食(日本料理)は大人気です。私の知人が経営するレストランでも、和牛や新鮮な魚介類を出したりしています。内緒ですが、「ウズベキスタン産マグロ」などというものもあります。「ウズベキスタンに海はあったかな？」と苦笑するところです。その実態は、日本からタシケントを経由して輸入したマグロ。ロシアは福島原発の処理水放出に反発して、日本からの水産物輸入を禁止しているので、ウズベキスタンの食品という扱いになっています。お値段はとっても高いですが、中東の観光客は臆せず注文しており、「お金は、本当にあるところにはある」と驚いてしまいます。

「輸入代替」が進み、ロシア製品の質も向上

クラスノダール州にあるワイナリーが、アルバート通りに直営レストランを出しています。最近ロシアのワイナリーも技術が進み、高品質のワインを作っています。ロシアは、2014 年 3 月のクリミア併合で経済制裁を受け、西側の商品が入りにくくなりました。それ以降、以前なら外国から買っていた物を国内で生産しようと、国を挙げて「輸入代替」政策を進めました。このレストランは、ロシアの輸入代替政策を象徴する場所なのです。

先日、ロシアの元外交官と話をして、「ロシアのワイン、



ワイナリー直営レストラン(輸入代替の象徴)

最近すごく良いらしいですね」と言ったら、「いやいや、やっぱりロシア産よりフランス産ワインの方がおいしい」と言っていました。モスクワの日本人駐在員の皆さんたちは、クラスノダール産ワインがお好きなようです。

あのユニクロが帰ってきた？

2022 年 3 月にユニクロはロシアの全店舗の営業を停止しましたが、ロシア側はショッピングセンター協会が営業再開を申し入れるなど、ユニクロ人気は衰えていません。それで、やっぱり何でも商売にする人が出てくるんですね。



マイキム(ユニクロの転売店)

韓国系ロシア人がやっている「マイキム」(MY KIM) という店があり、店内の半分以上がユニクロの商品です。中国の普通のユニクロ店で売っている商品をそのままモスクワに持ってきて売る「転売屋」さんです。商品説明は中国語のみ、値札もそのまま、ルーブルの値段がシールで上から貼ってあるだけです。ユニクロの公式サイトで値段を調べると、この店の販売価格は日本の約 4 倍もします。「これでは誰も買わないだろう」と見ていたら、けっこう店に人が入ってきます。この店は大きなショッピングセンターの中にあって、館内放送で「皆さん、あのブランドが帰ってきました！」と音声を出しているんです。「いや、帰ってきてないよ！」と私は心の中でつぶやくのですが、お客さんは値段を見て「うっ」となりつつ、それでも買う人は買います。小さいサイズの商品が多くて、ロシア人向けの大きなサイズはだいぶ不足している印象を受けました。



日本大使館の前では観光ビザを求め長蛇の列

写真は日本のビザを求めて大使館前に列を作るロシア人。2 月末のとても寒い日の朝 8 時です。雪が降っていましたが、それでも 50 人以上並んでいました。なんと、「今朝ドバイから着いた」というロシア人もいました。ドバイの日本大使館はオンライン予約しないと行けないんですね。しかも 2 か月待ちで、今日予約しても 2 か月後にしかビザ申請ができません。それでは桜の季節に間に合わないのです。モスクワでは、書類に不備さえなければ、申請から 3 日後にはビザがもらえます。私の知人も領事部でアルバイトをしており、大使館も高まる観光ニーズに応えようとしています。

進む中国製品のロシア進出

写真は 2 月の春節イベントです。モスクワ市は、季節ごとにいろいろなテーマでお祭りをやったり、豪華な装飾で通りを飾ったりしているのですが、今年の春節は半端でない力の入れようでした。赤の広場の隣のマネージ広場やトヴェルスコイ並木通りは、もうキラキラで目が痛くなるくらいの光のトンネルでした。

通りには、兵馬俑とかパンダ、中国のキャラクターなどが展示されて、皆さん嬉しそうに写真を撮ったりしていました。日本の文化に好感をもってくれるロシア人はもともと多いですが、最近は中国も本当に負けないと感じます。



街には中国車が増えました。2~3 年前までは「中国車はちょっと...」という感じがあったのですが、最近はデザインもスタイリッシュになっています。先日、モスクワ国際映画祭の取材に行った際、カッコいい車が展示してあるなどと思ったら中国車でした。最優秀賞作品の監督にプレゼントされるのだそうです。

ペルミの友人の話では、「もうだいぶ前から中国車が走っている」「家電量販店ではほぼ中国ブランドしか売っていな

い」ということで、地方都市の方が中国の影響が大きいのかもしれません。

以上が、最近のモスクワの状況です。ここから先は、私がこれまで取材したロシアの地方（前線の町）の様子を報告したいと思います。

前線の町の様子：

クルスク州、ベルゴロド州、ドンバス地方 （クルスク州）

ウクライナ軍がクルスク州スジャ地区に攻め込んできたのは昨年 8 月 6 日。私は 9 月上旬にクルスクに行ってきました。カレンナヤ・プステーニという美しい修道院で、国境周辺から避難してきた人たちを受け入れていました。ここは公式的な避難所ではありません。日本であれば、例えば地震や災害が起きた時、行政機関が避難所を開設しますが、ロシアのすごいところは、民間の人が勝手に避難所を始めてしまうのです。例えば、スポーツジムのオーナーが、「ジムを開放します」といった感じで避難民を受け入れたケースがあります。この修道院はもともと巡礼の人が泊まれる施設を持っているので、自然に避難所の役割を果たすことになりました。



クルスク州政府はこのような避難所を「後付け」で避難施設扱いにし、食糧や支援物資が届くようにしています。このような民間のパワーというのがロシアにはあります。

現地では、赤十字クルスク支部が支援にあたり、医師や医学生グループが赤十字に参加して、避難者に人道支援物資を提供していました。支援物資の中には薬局で使える金券がありました。5000 ルーブルの金券を発行して、その金券をクルスク市内の薬局チェーンで自由に使えるようにするのです。

「住宅クーポン」というものもあります。国境周辺では「あなたの家はもう住めないですね」という人がかなりいます。仮に戦争が終わったとしても、地雷除去や防衛線構築を考えると、国境間際に住むことは現実的ではありません。そういう人たちに、自分が以前住んでいたのと同じ面積の家をロシア国内で買える「住宅クーポン」を配布するわけです。昨年 9 月上旬の段階で早くもクーポンを受け取った人がいて、驚

きました。

私はこの 5 月初めにもクルスクに行ったのですが、その時には「もらうべき人のうち、住宅クーポンを受け取ったのは半分」と聞きました。受け取れていない理由は書類不備だそうです。土地・建物の所有権の書類を逃げる時に持ち出せなかった人は、裁判を通して所有権を確認しなければならないので、労力もお金もかかってしまいます。

昨年 9 月に訪問した際は、ミサイル警報のサイレンが 1 日に 7 回も 8 回も激しく鳴って、州知事からも「避難してください」という SMS が住民に届いていました。しかし、誰も逃げないのです。警報が鳴っても、ミサイル防衛システムで撃ち落としているから、特に何も起こらない。皆さんそれに慣れてしまって、隣の人としゃべったり、スマホを触ったりしていました。



白い箱のようなものは、身を守るためのコンクリート製避難ボックスです。これが停留所や市場など、人が集まる場所には必ず置いてあるのですが、警報でサイレンが鳴っても、ボックスに逃げ込んでいる人は一人もいませんでした。

（ベルゴロド州）

日本では、ベルゴロド州の被害はクルスク州に比べてほとんど知られていません。ミサイルやドローンの攻撃で、2024 年 7 月の段階で 200 人（現在では約 300 人）以上の民間人がベルゴロド州で亡くなっています。ベルゴロド市中心部のハートのモニュメントの隣にはデパートがあります。ここは



2023 年 12 月末に大規模攻撃があった場所で、親子連れを含む 25 人が犠牲になりました。それ以前からここにあったハートが追悼モニュメント

のようになって、いつも人形や花などが置かれています。ベルゴロド市よりも国境に近いシェベキノ市は、国境まで 5 キロぐらい。破壊の跡が生々しいです。ウクライナのドローンで一番恐れられているのが「バーバ・ヤガー」という、農業用ドローンを改良したもので、50 キロぐらいの爆発物を運

べてしまいます。これが住宅地などにも飛んできます。10 代の男の子が 5 人いた公園にこのドローンが飛んできて、その攻撃で一人が亡くなり、私は目撃者に取材をしました。

ただ、ベルゴロドは何か攻撃があつて破壊されても、できるだけ早く修復がなされており、素早く日常生活を再建する努力をしていました。街の景観を維持することもそうですが、例えば携帯基地局にドローンが突っ込んで電話が通じなくなったら、即座に修理に行って、次の日には通話できるようになっている、ということもありました。修理に行く方も命懸けです。そのように市民のために働いている人の姿が印象的でした。

(ドネツク)

今年の正月休みにドネツクに行ってきました。モスクワからドネツクまで直行バスで片道 15 時間でした。しんどかったですが、これでも速い方で、他都市を経由するため 22 時間かかるバスもあります。

ドネツクは、ベルゴロドと比べると、何もかも人の手が足りていない、追いついていない印象を受けました。市内に無傷の建物はほぼありません。背の高いビルは 100%、上の方が壊れていて、下の使える部分を使っているという状態です。



ドネツクはもとが大きくて立派な町だけに、インフラの修復遅れが目立ち、断水が深刻です。ただし、劇場や映画館、ショッピングセンターなど屋内の施設は人がいっぱいでした。スーパーの品ぞろえもモスクワと全く遜色なく、食品や日用品の供給に問題はありません。劇場は普通に営業していて、私が訪れた日は断水 2 日目にもかかわらず、バレエの上演をしていました。日常生活に支障があつても、芸術は通常通り進行しているところに、日本との国民性、芸術に対する捉え方の違いを感じました。

(マリウポリ)

マリウポリは、美しく修復された建物と戦争の跡がそのまま残っている場所が隣り合わせになっていて、統一感がなく、ちぐはぐな印象です。修理の施工業者の違いや、施工を請け負ったタイミングなどの違いで、景観に差が出てきてしまいます。また、集合住宅に比べて、一軒家は全くと言っていいほど修復が進んでいません。

私の友人の家も見ると影もなく破壊され、家の所有証明書が全部焼けてしまったので、去年の秋にようやく、裁判を通して住宅の権利を復活させました。ロストフ・ナ・ドヌーから裁判官が来て、出張裁判を行ったそうです。住宅自体は再建の途中なので、彼女は完成を楽しみにしています。彼女は今、知人宅に仮住まいしています。その家に呼んでもらい、クリスマスにごちそうしてもらいました。食生活は豊かで、スーパーに行っても地元の鶏肉や野菜など、物によっては、モスクワよりも良いものが並んでいました。

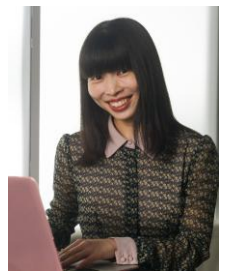


マリウポリは瓦礫がいつばいでも人々の表情は明るく、全体的にポジティブな雰囲気、活気があります。ドネツクは町という箱が大きいだけに、何だか物寂しい、取り残されていくような感じがしました。2 つの町は車で 1 時間半くらいしか離れていないのですが、それぞれの印象は大きく異なるものでした。(了)

「徳山あすかのロシア生活」

次号から連載開始！

ロシア・モスクワ在住の徳山あすかです。次号より「徳山あすかのロシア生活」と題して連載させて頂けることになりました。ロシア暮らしも 13 年目に突入し、移住当初の辛さはどこへやら、生活スタイルがかなりロシア化してしまいました。今ではモスクワ市内の集合住宅に住み、ロシアの会社に勤め、普通のロシア人と特に変わらない生活を送っています。しかし、まだまだロシアを理解したとは言えず、長く住めば住むほど、未知の世界への扉が開いていくのもまたロシアらしいと思います。



これまで、ジャーナリストとして政治経済の話題を記事にする機会はたくさんありましたが、ちょっとした生活上の出来事や珍事、小旅行の思い出など、誰かに伝えたいけれど、記事にする機会がなかったテーマもありました。この連載を通じて、それらを紹介することができれば嬉しく思います。プライベートでは一人旅、特に列車の旅が好きで、旅先では友情が芽生えることもあります。なかなか観光で訪れる機会のない、地方の魅力もお伝えしていければと思います。